
銀河転生伝説 ～新たなる星々～

使徒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

銀河転生伝説　　く新たなる星々く

【Nコード】

N5653W

【作者名】

使徒

【あらすじ】

159年に渡った銀河帝国と自由惑星同盟の戦争が終結してから5年、帝国は新たな回廊を発見する。それは、新たなる戦いの始まりであった。この小説は、らいとすたっフルール2004にしたがつて作成されています。

第1話 レンスプルト星域会戦

銀河帝国が自由惑星同盟を滅ぼし、銀河を統一してから5年。

帝国は、ノイエラント新領土（旧同盟領）にて新たな回廊を発見した。

この回廊は皇帝アドルフ1世によりドーバー回廊と名付けられ、調査が開始された。

ドーバー回廊は、フェザーン回廊ほどの広さはなく、最も狭い場所
はイゼルローン回廊の最狭部に匹敵した。

これは、要塞を建造すれば軍事的に回廊を塞ぐことが可能である
ということである。

そして、ドーバー回廊を抜けたその先には新たな星々の海が広が
っていた。

新天地。

それが、銀河帝国が新たな宇宙へ名付けた呼び名であった。

<アドルフ>

「何？ ロアキア統星帝国だと？」

「はっ、ドーバー回廊を抜けた先にあった一つの恒星系には人が住
んでおり、その恒星系はレンスプルト星系ということ、ロアキア統
星帝国という国家に所属していることが判明しております」

「国家規模は？」

「不明です」

ふむ……どのようなアクションを起こすにしろ現段階では情報が少な過ぎるな。

もう少し情報集めに専念したいところだが……

「正直言えば気が乗らんが……接触してしまった以上は無視する訳にもいかんか」

「では？」

「ロイエンタールに一個艦隊を率いてロアキアとの国交樹立に向かわせろ。それと、向こうにも連絡を入れておけ。余計な混乱は無い方が良い」

「はっ」

やれやれ、俺には荷が重いな。

こういう事態は。

……自由惑星同盟との戦争が終結してから6年。

軍ではメルカツやナトルプが既に退役しており、軍務尚書にはゼークトが、統帥本部総長にはシドーが、宇宙艦隊司令長官にはリーガンが就いている。

皇帝

アドルフ1世

軍務尚書

ハンス・ディートリッヒ・フォン・

ゼークト元帥

軍務次官

統帥本部総長

統帥本部次長

宇宙艦隊司令長官

宇宙艦隊総参謀長

宇宙艦隊司令官

ンハイト上級大将

級大将

上級大将

上級大将

上級大将

イヤー上級大将

ユーン大将

アフドレアス・ゴシエット上級大将

トルガー・フォン・シドー元帥

ヘルムート・レンネンカン普上級大将

ドナルド・ダック・リーガン元帥

ウルリッヒ・ケスラー上級大将

アーダルベルト・フォン・フアーレ

アウグスト・ザムエル・ワーレン上

アルフレッド・ガーシュイン上級大将

ウォルフガング・ミッターマイヤー

エルンスト・フォン・アイゼナツハ

オスカー・フォン・ロイエンタール

カール・グスタフ・ケンプ上級大将

クリストフ・フォン・ドロツセルマ

コルネリアス・ルッツ上級大将

ナイトハルト・ミュラー上級大将

ユルゲン・シュムーデ上級大将

アルト・スプレーイン大将

アルフレット・グリルパルツァー大将

グエン・バン・ヒュー大将

ダステイ・アッテンボロー大将

ハンス・エドアルド・ベルゲングリ

フォルカー・アクセル・フォン・ビ

ユーロー大将

イン大将

ブルーノ・フォン・クナツプシュタ

マリナ・フォン・ハプスブルク大将

レオポルド・シューマツハ大将

カール・ロベルト・シュタインメツ

近衛艦隊司令官

ツ上級大将

帝都防衛司令官

幕僚総監

ヘルマン・フォン・オットー上級大将

エルネスト・メックリングー上級大将

憲兵総監

モルト上級大将

装甲擲弾兵総監

ヘルマン・フォン・リユーネブルク

上級大将

装甲擲弾兵副総監

ワルター・フォン・シェーンコップ

大将

ちなみに、ホルスト・ジンツァー大将は近衛艦隊の副司令官を、チ
ウン・ウー・チェン大将は（近衛艦隊の）参謀長をやってる。

上級大将だの大将だのがたくさん居るのにポストが少ないから人事
に苦労するよ。

新しいポストでも作るか？

あ、率いる艦艇は基本的に上級大将が15000隻で、大将が80
00隻ね。

＊ ＊ ＊

宇宙歴805年／帝国歴496年5月5日。

ロイエンタール上級大将率いる15000隻の艦隊は、ロアキア統星帝国との国交樹立のためドーバー回廊を通過し、ロアキア領レンスプルト星系へと侵入した。

驚いたレンスプルト星系の領主であるガウト男爵は、国交を樹立することになる銀河帝国への示威行為のため近づいていた統星艦隊の一つであるバートウッド艦隊に慌てて『早く来い』との連絡を入れた。

ロアキアは銀河帝国を（自分たちが存在すら知らないほどの）辺境の小国家と認識しており、まさか10000隻を超える大艦隊を有しているとは夢にも思っていなかったのである。

ガウト伯爵の連絡から銀河帝国が（伯爵領に）攻撃を加えてきたと勘違いしたバートウッド中將は、現地へ急行し遊弋するロイエンタール艦隊に問答無用で攻撃を仕掛けてしまう。

いきなりの攻撃にロイエンタール艦隊は混乱したものの、すぐに混乱を鎮め艦隊の秩序を取り戻した手腕はロイエンタールならではの物であった。

ロイエンタール艦隊15000。

バートウッド艦隊14000。

数は互角である。

だが、指揮官の力量には大きな差が有った。

「敵の攻撃には粗さが目立つ。その隙を突いて切り崩せ！」

いきなり陣形も整えずに攻撃を仕掛けた影響かバートウッド艦隊の

陣形は縦に伸びきっている。
そして、そこを見逃すロイエンタールではなかった。

一部の部隊を長い縦列となったバートウッド艦隊の側面に展開させ、攻撃を仕掛けたのである。

「……くっ、いったん後退せよ」

バートウッド中將は堪らず艦隊を後退させ、艦隊の再編を図る。

「深追いは無用。こちらでも艦隊を再編せよ」

一方のロイエンタール艦隊も一連の戦いで陣形が乱れており、無理な深追いをせず艦隊の再編にかかった。

両軍の再編が完了し、戦闘が再開されたのは八時間後のことであった。

しかしバートウッド艦隊の攻撃は先程とは違い、やや積極性に欠けていた。

「ほお、様子見か」

「最初とは打って変わって大人しくなりましたな」

「敵には我が軍の情報が無い。まあ、それは此方も同じだが……しかし、慎重になった敵を正攻法で切り崩すのは少々骨が折れる。ならば……左翼部隊に命令、敵右翼に攻撃を集中せよ！」

ロイエンタール艦隊の左翼はバートウッド艦隊の右翼に攻勢を仕掛ける。

気を抜けば一気に突き崩されそうな猛攻に、バートウッドはただ必死に堪えるしかなかった。

「ええい、ここは堪えるのだ！ 敵の攻勢が限界に達したところで逆攻勢を掛ける！」

だが、それこそがロイエンタールの狙いでもあった。

「さ、更に右から敵が来ます！」

「何イ！？」

ロイエンタールは左翼部隊に攻勢を掛けさせることで敵の目を引き、その間に自軍の中央と右翼より徐々に戦力を引き抜いて、攻勢を掛ける左翼の更に左からロアキア軍右翼の側面へと奇襲を仕掛けたのである。

これによりロアキア軍右翼の戦線は崩壊し、火達磨になってのた打ち回った。

あるいは、この時こそ（右翼を見捨てることが前提だが）ロアキア軍が最小の被害で撤退する好機であったかもしれない。

しかし、バートウッド中將は味方を見捨てることができず、されとて有効な手を打つこともできず悪戯に損害を増やしていった。

「脆いな。一度崩れるとこうまで脆いとは……まるで自分達より圧倒的に劣ったものとしか戦ったことの無いような……そう感じる」

このロイエンタールの推測は的を得ていた。

ロアキア統星帝国は長きに渡り宿敵ルフェール共和国と争っているものの、直接矛を交えることは無く、ルフェールとの緩衝地帯でもある辺境星域の小国同士の小競り合いに偶に顔を出すのが精々であった。

結果、ロアキアの将兵たちは自分たちと同等以上の敵と戦った経験が皆無だったのである。

オリアス皇子以下数人の提督が一度ルフェールと大規模な艦隊戦を行ったことがあるものの、バートウッドはそれには参加していなかった。

「ワルキューレを出しますか？」

「うむ、今が好機だ、敵を殲滅せよ！」

1時間後、戦場に残っているのはロイエンタール艦隊と、残骸となったバートウッド艦隊の成れの果てだけであった。

バートウッド中將は戦死し、艦艇3000隻が降伏、1000隻程が逃亡。

その他のロアキア軍は残らず撃沈されていた。

期せずして始まったこの戦闘であったが、結果は銀河帝国の勝利に終わった。

だが、これは長きに渡る新たな戦いの始まりに過ぎないのであった。

第2話 これは敵の陰謀ですか？ いいえ、アドルフの責任転嫁です

——マリウセア星系第三惑星ロアキア——

ロアキア統星帝国の首都星でもあるこの星に緊急報告が届いたのは5月8日のことであった。

「バートウッド艦隊が壊滅……だと!？」

ロアキア統星帝国第五皇子であり、ロアキアの実質的な最高権力者であるオリアス・オクタヴィアヌスは、信じられないという表情で報告書を目にした。

バートウッド艦隊は14000隻の大艦隊であったが、戦場より無事に撤退出来た艦は1000隻に満たなかった。

13000隻。

一度の会戦でこれほどの損害が出たのは、ロアキアの歴史上初である。

「いささか、銀河帝国とやらを侮り過ぎていたようすな。よもや15000隻にも及ぶ艦隊を有しているとは……」

そう応えるのは宰相のプラヌス。

オリアスが幼少の頃より教育係として仕えており、オリアスに帝王学を叩き込んだ人物でもある。

それ故、オリアスは敬意と信頼を込め彼のことを『先生』と呼んでいた。

「報告によれば、こちらの誤解により発生した戦闘のようですが」

「バートウッドに非が有るとはいえ、報復は必要だ。このままでは我がロアキアの沽券に関わる」

なるほど、とプラスは返す。

確かに、この問題は現場の暴走で済ますことのできる事態では無かった。

「私が艦隊を率いて一戦を交える。奴等を打ち破った後、改めて交渉を開始するでしょう。無論、こちらに有利な形でな。出来るなら、こちらの支配下に置きたいところだが……」

「敵の規模が判らぬ故、確実なことは言えませんが、それは難しいでしょうな。あの艦隊が敵の全てというわけではありませんまい。彼らとの戦いで下手に消耗すれば、ルフェールやティオジア連星共同体の連中を利すばかりですぞ」

ロアキアとほぼ同等の国力を有するルフエール。

先年発足し、辺境13国の内9カ国（アルノーラ、ウェスタディア、シャムラバート、大康国^{ダイジエン}、トラベスタ、ドルキン、ノス・ベラル、ハーラン、リンドガット）が参加するティオジア連星共同体。

ロアキアの国力低下は相対的にこれらの国々の地位を高めることになる。

そうなれば、ロアキア傘下の国であるイグディアスやオルデランもロアキア陣営を離脱しかねない。

「……そうだな、先生の言う通りだ。多くを望んだが故に多くを失う愚は避けるでしょう」

この1週間後、オリアスは直営の艦隊15000隻を率いて帝都ロアキアを進発した。
途中、マルゼアス艦隊15000、オルメ艦隊11000を加えたその総数は41000隻に達する。

銀河の半分を統べるロアキア統星帝国が本格的に動き出そうとしていた。

＊ ＊ ＊

——新帝都フェザーン——

一方、銀河帝国第38代皇帝であるアドルフ1世の元にも、先日の戦闘及びその後の調査結果に関する報告書が送られていた。

「……なるほどね」

レンスプルト星系を占領したロイエンタールからの報告で、アドルフはロアキア統星帝国という国家の概要がある程度分かってきた。

「10万隻以上の艦隊を常備している大国か……」

戦闘艦艇の数こそ全盛期の自由惑星同盟より劣るが、同盟が国家総動員体制を敷いていたことを考えると総合力では互角か……もしくはロアキアが上回るだろう。

どちらにせよ、容易にはいきそうにないことは確かである。

だが、指揮官や兵の質ではこちらが圧倒的に勝るとアドルフは考えている。

片や長きに渡る自由惑星同盟との戦争を勝ち抜いた銀河帝国。

片や自分よりも数で劣る敵に圧倒的な戦力を叩きつけることしか経験のないロアキア統星帝国。

同数以上の戦闘の場合、どちらが精神的に優位かは明白であった。

<アドルフ>

ここは、もうひと押しすべきだな。

資料を見る限り、ロアキアがこのまま大人しく引き下がるとは思えない。

最低でも、もう一戦はすることになるだろう。

敵も次は相当数の戦力を揃えてくるだろうから、ロイエンタールだけじゃちとキツイな。

幸い、ミッターマイヤーとスプレインが既に向かっているから兵力的に著しく劣勢になることは無いと思うのだが……。

念には念を入れておくか。

「ファーレンハイトとミュラーを呼べ」

・・・

しばらくして、ファーレンハイトとミュラーが俺の前に現れる。

「ファーレンハイト、卿は直ちに艦隊を率いて新天地へと向かえ」

「御意」

「ミュラー、卿はガイエスブルクの要塞司令官兼駐留艦隊司令官となり、要塞を新天地へと移動させろ。三長官には俺から話を通しておく」

「ガイエスブルクを新天地へ……ですか？」

「そうだ、この先何がどうなるか予測がつかん。補給と艦艇の整備ぐらいは支援しとかなとな」

「そういうことであれば、微力を尽くしましょう」

「うん。では、卿らの武運を祈る」

俺がそう言って敬礼すると、二人も敬礼して部屋から出て行った。

それにしても、気になると言えばロアキア以外の国家もだな。

ロアキアと同等の国力を持つルフェールに9カ国の小国が連合したティオジア連星共同体。

これら一つ一つは、銀河帝国には及ばない。

だが、我々という未知の勢力に対しロアキア、ルフェール、ティオジア連星共同体が協力態勢を築くことになれば……。

悪夢だな。

これは最悪のケースも考えて、ドーバー回廊にイゼルローン級の要塞を建設しておいたほうが良いか。

だが、イゼルローン級の要塞となると完成は少なく見積もって7、8年はかかる。

どうすべきか……。

よし、オダワラ要塞をドーバー回廊へ持って行こう。

あれはイゼルローン要塞には及ばないが、ガイエスブルク要塞に匹敵する。

新要塞の建造まで回廊を守り通してくれるだろう。

しかし、さすがにこれだけのことを俺の独断で決めるわけにはいかんな。

決定は三長官と協議をしてからにするか。

……やべえ、そう言えば今日発売の新作エロゲ買うの忘れてた。
急いで買いに行かねば！

くそっ、これもロアキアの陰謀か！
この恨みは忘れぬぞ！

第3話 第二次レンスプルト星域会戦

宇宙歴805年／帝国歴496年6月20日。

バートウッド艦隊との戦闘で、艦艇を14000隻に減らしたロイエントール艦隊の元ヘミッターマイヤー艦隊15000とスプレイン艦隊8000が合流した。

これで新天地派遣軍の総数は37000隻となり、ロイエントールが総司令官に任命された。

この後も、ファールンハイト艦隊15000隻に駐留艦隊15000を擁するガイエスブルク要塞が到着予定である。

また、アッテンボロー大将を要塞司令官兼駐留艦隊司令官としたオダワラ要塞（駐留艦隊8000隻）もドーバー回廊に居座ることとなっている。

この時点で、帝国が新天地（ドーバー回廊含む）へ向けて動かした戦闘艦艇は76000隻。

本国で更にグリルパツルアー艦隊、クナップシュタイン艦隊、グエン・バン・ヒュー艦隊（それぞれ8000隻）の動員がかかったことを考えると、新天地に投入される兵力は10万隻に達するだろう。

これは、銀河帝国の総戦力（戦闘艦艇のみ）の3分の1にもなる。

新天地の攻略準備は着々と進みつつあった。

<ロイエンタール>

ほう、俺がこの部隊の総司令官か。

今、俺の麾下には37000隻の艦艇がある。

指揮下の司令官はミッターマイヤーにスプレイン。

どちらも優秀な将官だ。

ファーレンハイトとミュラーも到着し次第俺の指揮下に入る。

6年前に帝国が同盟を征服したときは、もうこれで本格的な会戦を行うことも無いなと思ったものだが……。

新たなる地、新たなる星々に新たなる敵か。

世の中分らないものだ。

だが、だからこそ面白い！

＊ ＊ ＊

宇宙歴805年／帝国歴496年7月10日。

オリアス皇子率いるロアキア軍はレンスプルト星域に侵入し、待ち構えていた帝国軍と対峙した。

「ファイエル！」

「攻撃開始！」

遂に第二次レンスプルト星域会戦が幕を開けた。

帝国軍37000隻、ロアキア軍41000隻。
戦力的には互角と言っているだろう。

両軍のビームやミサイルが交差する中、帝国軍はスプレイン艦隊を、ロアキア軍はオルメ艦隊をそれぞれ予備兵力として後方に置き、互いに投入する機会を窺う。

しかし、両軍の将とも優秀であったためこれといった機会はなかなか訪れず、ビームとミサイルによる応酬が延々と続くだけであった。

・・・

戦闘開始から既に6時間が経つが戦況は依然膠着状態にあった。

ロイエントールは、オリアスが攻勢に出ようとする都度その突出部分を潰してオリアス艦隊の攻勢を封じ込めたが、ロイエントールとオリアスの絶妙な指揮の前に攻勢の機会を見出せずにいた。

ミッターマイヤー艦隊はその迅速さで以ってマルゼアス艦隊を翻弄していたものの、堅実な用兵をするマルゼアスの中々崩せずにいる。

スプレイン、オルメ両艦隊は未だに動かない。

並みの将であればこの状況に焦りを感じ、焦燥感に駆られて前進か後退を命じていただろう。

だが、ロイエントールは特に焦りを感じていなかった。

経験上、このような膠着状態はいつか解ける。
動くのはその時だ……と。

故に、ロイエンタールは艦隊を完全に統制しつつ的確な火力の集中によってオリアス艦隊に出血を敷いていった。

・
・
・
・
・

戦況が変わったのは11日に入ってからのことであつた。

ミッターマイヤーがマルゼアス艦隊の各所に小さな突破口を開き、それらの点を線に繋いで一挙に前進を果たしていた。

「敵が侵入してきます！」

「く、いったん後退せよ」

形勢不利とみたマルゼアス大將は艦隊をいったん後退させる。

「今だ、ワルキューレを出して前方の敵艦隊を蹂躪せよ！」

マルゼアス艦隊が後退したことで、敵艦隊の連携が一時的に途絶したことを見抜いたロイエンタールは、この氣に攻勢をかける。

無論、オリアスとて一流の将帥。

敵が攻勢に転じてくるのは予想していたが、オリアスとロイエンタールの力量はほぼ互角。

もしくは、経験の差でロイエンタールといったところである。

であれば、上手くチャンスをもにした方が主導権を握るのは自明

の理である。

戦いの趨勢は帝国軍に傾きつつあった。

「殿下、このままでは……」

「仕方無い、オルメ艦隊に入電。敵の側面を突け……とな」

オリアスはこの流れを変えるため、予備兵力であるオルメ艦隊の投入を決める。

帝国軍も予備兵力を出してこれを防ぐだろうが、オルメ艦隊との戦力差は3000隻前後。
十分に勝機はあると踏んでいた。

「ほう、ここで切ってくるか。スプレイン艦隊に抑えさせろ」

ロイエンタールも、予備兵力としていたスプレイン艦隊を投入する。

元々、こんなときの為に温存していた部隊だ。
ここで切らない手は無い。

激突した両艦隊はやはり数の差で勝るオルメ艦隊が押しつつあり、
今にもスプレイン艦隊を突破しそうな勢いである。
スプレイン艦隊の中央は大きく下がり、もうすぐV字形になろうとしている。

「ん？ いや、待て」

ここでオルメは敵が意図的にV字型の陣形を構築しつつあることを

悟った。

その証拠に、目の前の艦隊は崩れかけているにもかかわらず、その行動は妙に秩序立っている。

「ちっ、なかなか侮れん。いったん進撃中止だ」

オルメ艦隊が突撃を中止したことによって、オリアスは継戦か撤退かの決断を迫られることになった。

このまま戦闘を継続しても無意味な消耗戦でしかない。

しかし、撤退もまた安易に決断できるものではなかった。

そもそもこの戦い自体が、ロアキアの沽券を保つために行われた戦闘である。

ここで引けばロアキアの威信が失墜するのは目に見えていた。

軍事的な理由ではなく、政治的な理由で軍事行動が制限される。

やり難いことこの上ない。

この時、オリアスは思考に耽っており一時的に戦況を把握していなかった。

そのため、ロイエンタール艦隊の一部が前進と後退を繰り返すという奇妙な動きをしていることに気づくことができないでいた。

このロイエンタール艦隊の動きに釣られ前進してしまったのは、オリアス艦隊の先鋒であるミューリッツ少将の分艦隊である。

「青二才に用兵のなんたるかを教えてやるとしよう。ファイエル！」

ロイエンタール艦隊は、ミューリッツの部隊を火線の中心圏に引き

ずり込み至近距離からビームとミサイルを浴びせかけた。

「反撃しつつ後退！」

「ダメです！ 退路を断られました！」

ミューリッツが反撃と交代を交互に行うつど、ロイエンタール艦隊は先手を打ち、強かに損害を与えていった。

「ミューリッツ提督の部隊が！」

「これは……全艦前進してミューリッツを救い出せ！」

オリアスはすぐに救出の命令を下す。

「オリアスの本隊が出てきたか、ここまでのようだな。いったん後退せよ」

オリアスの本隊が出てきたことで、無意味な出血を嫌ったロイエンタールは艦隊をいったん引いて陣形を整えさせる。

この短期間の攻防で、3000隻だったミューリッツ分艦隊はその数を600隻にまで減らしていた。

「（この私としたことが、このようなミスをするとは……）全軍後退、撤退する」

ここに至って、オリアスは撤退を決断した。
元々、迷っていたところにこの損害。

撤退を決意させるには十分であった。

ロアキア軍は戦場から撤退し、帝国軍も無用な追撃は行わなかった。戦況は帝国軍に有利だったとはいえ、ロアキア軍は余力を持って撤退するのである。

地の理が向こうにあることも考えると追撃のリスクは大き過ぎた。

こうして、第二次レンスプルト星域会戦は終結した。

帝国軍の損失艦艇4500隻。

ロアキア軍の損失艦艇7900隻。

戦術・戦略的に帝国軍の勝利であった。

第4話 第二次ガイエスブルク要塞攻防戦

「そんな、あのロアキアが負けるなんて……」

辺境13国の1国であるウェスタディア王国宰相アルベルト・アルファーンは送られてきた報告に目を丸くしていた。

銀河帝国という未知の国家にロアキアがレンスプルト星域において敗れる。

これだけでも重大事件であるのに、再度のロアキアの敗北（オリアス皇子自らが報復に赴いた第二次レンスプルト星域会戦は戦術上引き分けであり、実質的にはロアキアの戦略的敗北であった）。

この一連の出来事は辺境星域に対するロアキアの圧力を減らすことになるだろう。

だが、アルファーンは単純にロアキアの影響力が弱まったと喜べなかった。

これは、ロアキアより強力な勢力が現れたということである。そしてその勢力がこちらに友好的とは限らない。

また、ロアキアが銀河帝国とやり合っている内にルフェールが触手を動かす可能性も考えられた。

ティオジア連星共同体の発足により、銀河を統べる二大国（ロアキア、ルフェール）に一定の発言権を獲得するに至ったばかりである。

余計な火種はウェスタディアとしても望むところでは無いのだ。

「これ以上の敗北をロアキアが放置できるはずがない。あのオリアス皇子なら必ず先日以上の大兵力で以ってリベンジを挑むだろうけど……」

それに失敗すればロアキアは内部分裂する。

四人の兄を殺し、皇帝を幽閉して実権を握ったオリアスに反感を持つ者は多く、そういった者たちがオリアスを失脚させようと動き出すのは十分に考えられる。

統制帝の皇子で残っているのはオリアス1人だが、皇女は何人も健在であるため神輿に困ることは無い。

あるいは、銀河帝国に下るか手を結ぶ者たちも出てくるかもしれない。

いずれにせよ、次の一戦がロアキアの命運を決めるだろう。

それと、銀河帝国についての情報が不足しすぎている。

どのぐらいの規模の国家なのか、どれほどの戦力を有しているのか、何も分からない。

もし、ロアキアが勝利していれば捕虜から情報を得ることも出来たであろうが……。

少なくとも、現時点で判明しているのは万単位の艦隊を有していることと、オリアス皇子を上回る優秀な将がいるということだけである。

前途多難であった。

宇宙歴805年／帝国歴496年8月15日。

レンスプルト星域において、新天地派遣軍にファーレンハイト艦隊とガイエスブルク要塞に駐留するミュラー艦隊が合流した。

先日の戦闘での損失艦艇は、ロイエンタール艦隊約2000隻、ミッターマイヤー艦隊約2000隻、スプレイン艦隊約500隻であり、その結果ロイエンタール艦隊12000隻、ミッターマイヤー艦隊13000隻、スプレイン艦隊7500隻まで艦艇を減らしている。

ファーレンハイト、ミュラー両艦隊合わせて30000隻の加勢はありがたかった。

更に、グエン・バン・ヒュー艦隊8000も既にフェザーンを出立しており、合流すればその新天地派遣軍の戦力は70000隻を超える。

ここまで艦艇数が増えるとガイエスブルク要塞だけの補給は厳しくなるが、移動要塞に改造されたレンテンベルク要塞がレンスプルト星域に配置されることが決定しており、それまでの辛抱である。また、先日ガイエスブルク級の要塞であるオオサカ要塞が竣工し、これも遠からず新天地に配備されるだろう。

ガイエスブルク要塞にて補給や損傷艦艇の修理を行うロイエンタール、ミッターマイヤー、スプレイン艦隊に代わり、ファーレンハイト艦隊がレンスプルト星域の先にあるウルガンテ星域の制圧に向か

った。

ウルガンテ星域の領主であるコッツペラー男爵は抵抗したものの、圧倒的戦力差の前には屈せざるを得なかった。

・
・
・
・
・

第二次レンスプルト星域会戦の後、首都星ロアキアに戻ったオリアスは統星艦隊の集結を命じ、各地から艦隊を集めた。

その数、約75000隻。

ロアキア史上最大の動員である。

「これより、我がロアキアの総力で以って侵略者どもの軍勢を叩きつぶす。全艦出撃！」

＊
＊
＊

宇宙歴805年／帝国歴496年11月25日。

ウルガンテ星域にロアキア軍が侵入し、第二次ガイエスブルク要塞攻防戦は開始された。

帝国軍約55000隻、ロアキア軍約75000隻。

艦艇数ではロアキア軍が上回っていたが、帝国軍にはガイエスブルク要塞がある。

「ウルガンテから送られてきた情報によりますと、どうやら敵軍の一部がハルトン星域の制圧に出向いているようです。数は7000

「8000隻。先日の別動隊かと思われます」

「それは好都合だな、各個撃破の好機だ」

「敵2個艦隊捕捉、数25000」

「先日の艦隊か、マルゼアスとオルメに相手をさせろ。我らはその隙に要塞を攻撃し敵戦力の分断を図る」

帝国軍の戦力はロアキア軍の3分の1でしかなく、要塞攻略に割ける戦力は十分にある。

「（あの要塞を落とせば敵の作戦行動範囲を狭めることが出来る上、補給線が長大になり分断しやすくなる。今いる敵も撤退を選択せざる得まい）」

ロイエンタール、ミッターマイヤー艦隊とマルゼアス、オルメ艦隊が交戦状態に入った。

「よし、ライニッツ艦隊を要塞へ突入させろ」

オリアスの命を受け、ライニッツ中将率いる9000隻の艦艇がガイエスブルク要塞へと突入を開始する。

「敵はこのガイエスブルクを動く要塞程度にしか考えていないようだな。ガイエスハーケン発射用意……撃てえ！」

ガイエスハーケンがライニッツ艦隊に撃ち込まれる。

「ライニッツ艦隊……半減」

「第二射来ます！」

ライニッツ艦隊がガイエスハーケンの射程外に退避し終えたとき、
残存艦艇数は2500隻。
8割以上の艦艇を失っていた。

「あれほど強力な砲があるとは……」

「直上より敵艦隊強襲！」

それは、ファーレンハイト上級大将率いる帝国軍15000隻であった。

「オリアス皇子をお守りしろ！」

ロズボーン提督率いる12000隻の艦隊がファーレンハイト艦隊の前に立ち塞がる。

しかし、数の上でも勢いの上でも勝るファーレンハイト艦隊を押し止めるのは不可能であった。

「ロズボーン艦隊、突破されます！」

「ほう、敵もやるではないか」

ロズボーン艦隊を突破したファーレンハイト艦隊は、そのままオリアス艦隊へと突撃する。

「殿下、このままでは！」

「心配いらん。窮地に陥ったのは敵の方だ」

オリアスは帝国軍に伏兵があるのを予測していたのである。

ファーレンハイト艦隊の側面にメルボド艦隊8000、ブルーナ艦隊5000が展開し、先のガイエスハーケンでボロボロになったライニッツ艦隊が名誉挽回とばかりに要塞への退路を断つ。

ファーレンハイト艦隊は完全に包囲された。

オリアス艦隊を突破できれば問題は無いのだが、ロイエンタールに匹敵する腕を持つオリアス相手にそれは難しい。

「逆にこちらが包囲されたか……：よろしい、本壊である。砲撃を一点に集中して敵陣を強行突破する！」

アースグリムの艦首より大口径のビームが放たれ、包囲陣の中で最も薄いライニッツ艦隊を薙ぎ払う。

この一撃でライニッツ艦隊旗艦カイオリントが消滅し、ライニッツ中將は戦死した。

「逃がしたか……まあいい、あの艦隊が再編を終えるまでに決めればいいだけのこと。前線にメルボド、ブルーナ両艦隊を投入せよ」

包囲網を突破したファーレンハイト艦隊が後退し、前線にメルボド、ブルーナ両艦隊が出てきたことで戦力比はロアキアに大きく傾いていた。

ロアキア軍の圧力に押された帝国軍はじりじりと後退する。

「味方が居ればあの巨砲は使えまい。突入の好機だ、全艦で押し込

め！」

ロアキア軍がロイエンタール、ミッターマイヤー両艦隊に殺到する。頼みのガイエスハーケンもこの状態では使えない。

「敵増援が要塞内より出撃してきます。数、15000」

それは、これまで要塞内で待機していた『鉄壁』ミュラーの艦隊であつた。

「く、まだ余力を残していたか」

それでも、オリアスは攻撃を続行した。

ここで手を引けば、強力な要塞砲を持つガイエスブルク要塞に再び肉薄するのは困難であることを分かっているためである。

ファールンハイト艦隊が戦列に復帰しても数ではロアキアが上回る。ここは攻め続けるしかなかった。

「数はこちらが上だ、戦闘艇を出して近接戦闘に持ち込め！」

ロアキア軍の艦艇より戦闘艇が次々と出撃していく。

「敵の戦闘艇が発進してきます！」

「こちらもワルキューレを出せ。総力戦になる、要塞からもワルキューレを出撃させろ」

しばらくの間、両軍の戦闘艇による激闘が繰り広げられる。

それが終わった後も、ロアキア軍は未だ『鉄壁』ミュラーの艦隊を

抜けずにいた。

迂回しようにも、ロイエンタール、ミッターマイヤー、フアーレンハイト艦隊の適切な動きによって防がれる。

戦いは、消耗戦の様相を呈してきた。

「ロイエンタール提督、このまま消耗戦になれば数に劣る我々が不利です」

「そうだな、次はこちらから動いてみるか。ミッターマイヤー艦隊旗艦ベイオウルフに連絡、『敵側面を突け』とな」

「はっ」

「ミッターマイヤー艦隊を援護する。主砲、斉射三連！」

ロイエンタール艦隊による砲撃でロアキア軍を牽制している間に、ミッターマイヤーは戦線より抜け出していく。

その後、艦隊を右へ回しロアキア軍の左側面を突こうとする。

「敵1個艦隊、側面に回りつつあります」

「ちっ、ロズボーンに防がせろ。正面はまだ抜けんのか！」

「敵、未だ崩れません」

「!! 前方に艦影、これは……敵の増援です！」

「く、ハルトン星域の艦隊が戻ってきたか」

オリアスの予想とは違い、現れたのはグエン・バン・ヒュー大將率いる艦隊であった。

ウルガンテ星域への到着予定は翌17日であったが、ロアキア軍襲来の報を聞いて急ぎ駆けつけて来たのである。

「おお、間に合ったようだな。行くぞ、全艦突撃だー！」

グエン・バン・ヒュー艦隊の参戦は、押されぎみであった帝国軍を活気づかせた。

これまで受け身だった帝国軍は少しずつ攻勢に転じるようになる。それでも尚、兵力ではロアキア軍が勝っていた。

両軍の兵力差が逆転するのは11月27日2時55分のことであった。

ロアキア艦隊襲来の報を聞いたスプレイン艦隊が急ぎ戻ってきたのである。

『数において勝る敵軍と無傷の要塞。ここに至ってはもはや勝利は望めますまい、小官は撤退を具申致します』

「そんなことは分かっている！　だが……」

ここでオリアスが敗北すれば、ロアキアの内部分裂は必至。それ故に、オリアスは撤退を決断できずにいた。

『それでも、ここで殿下を失うわけにはいかんです。どうか、ここは一度退いて捲土重来を』

「……分かった。全軍、退却」

11月27日5時40分。

第二次ガイエスブルク攻防戦はロアキア軍の全面退却を以って収束した。

帝国軍の損失艦艇16025隻。

ロアキア軍の損失艦艇27402隻。

ロアキア軍の損害は帝国軍を大きく上回り、全軍の3割を超えていた。

そして、これがロアキア統星帝国没落の第一歩であった。

——後日談——

後日、この戦いの報告書を見たアドルフが、

「うわっ、ライニッツとか言う提督の艦隊あまりにもフルボッコ過ぎてワロタ。これマジ涙目じゃね？ エロ本でも葬式に送っとくか？」

と言って同情していたとか。

本当にどうでもいい話であった。

第5話 ロアキア動乱1

宇宙歴805年／帝国歴496年11月30日。

セーラー〇ーンを見て「変態仮面^{タキシード}かけー！」とか言う息子の将来を心配しているアドルフはアルツール・フォン・シュトライト大將から差し出された書類に目を止めた。

「なんだあゝ、また報告書か？」

「先日行われた第二次ガイエスブルク要塞攻防戦の報告書です」

そう言って書類を手渡すシュトライト。

何日か前にそんな連絡あったな〜と思いだしながら、アドルフは報告書に目を通す。

「うわっ、最終的に投入された兵力が両軍合わせて15万近くって……」

「それだけ敵も必死だったということでしょう。彼の国の実戦部隊のおよそ半数を投入したのですから」

ロアキア統星艦隊の総数は約15万隻。

星間警備隊や貴族たちの私兵部隊を合わせれば更に増えるとはいえ、先日の戦いでロアキアが動員した戦力はかなりのものであった。ちなみに、ルフエールの正規艦隊は約12万隻である。

「勝ったはいいが、こちら丸々1個艦隊を失っているため戦力の補充が出来るまで動けんか。それに、ロイエンタールとミッターマイヤールの艦隊の消耗が激しい。近々戻さねばならんな」

特にロイエンタール艦隊は3度会戦を行っており、これ以上の戦闘は厳しかった。

「クナツプシュタイン、グリルパルツァー両艦隊が到着し次第ロイエンタール、ミッターマイヤー艦隊を順次帰還させよ。代わりとしてケンプ艦隊を派遣する」

「はっ、手配しておきます」

「……さて、そろそろ絡め手を使っても良い頃だと思うんだ」

「と、申しますと？」

「皇帝を幽閉して権力を握ったオリ阿斯皇子がこれだけの大敗を喫したのだ、何らかの動きがあつて然るべきだろう。例えば、反乱とか」

「……………」

「まあ、流石にそれは都合が良過ぎるとはいえ、我が国の勢力圏と隣接する領地の貴族共はさぞかし青ざめていることだろうな」

「つまり、彼らを味方につけるので」

「私は彼らに手を差し伸べてやるだけだ。『銀河帝国に付けば地位も領土も保証してやる』とな」

「確かに、有効な手です。しかし悪辣ですな」

「仕方あるまい、彼らの主が頼りにならぬのだ。新しい宿主を見つけないと思うのも不思議ではないだろう？」

「分かりました。ロアキア内での分裂工作を進めておきます」

「うむ、頼む」

と、話がひと段落した所でいきなり執務室のドアが開いた。

「パパー、お話終わった〜？」

入ってきたのはアドルフの三女カロリーネ。
年齢は5歳。

「ああ、今終わったよ。ついでに今日の執務も終わったから今からフリーだ」

「……陛下」

もちろん執務は全てどころか半分も終わってない。
が、アドルフにとってそんなことは些細なことであった。
書類なんぞ見たくも無いというのものもあるのだろう。

「シュトライト、後は頼むぞ！」

そう言って執務室から出ていくアドルフ。

残ったシュトライトは大きく溜息をついた。

＊ ＊ ＊

ウェスタディア王国の首都星ウェリンにある王宮。
その会議室に5名の人物が集まっていた。

ウェスタディア王国の統治は女王であるルシリア・ラデュ・ウェスタディア1世以下、

宰相アルベルト・アルファーニ

軍務卿ロンギ

内務卿ブラマンテ

財務卿ベリーニ

の5名による合議制でなされている。

今日の会議は、第二次ガイエスブルク要塞攻防戦におけるロアキア
統星帝国の敗北についてであった。

「よもや、あのロアキアがこうまで立て続けに敗れるとはな……」

ウェスタディア王国は過去にロアキアと2度矛を交えている。

ラミアム領のストリオン星域で行われたストリオン星域会戦。

シャムラバート領で行われたシャムラバート広星域会戦。

どちらも戦略的にはともかく、戦術的には敗北していたと言っても
良いだろう。

ストリオン星域会戦ではアルファーニの奇策によってロアキアの包

罅を脱した。

シャムラバート広星域会戦ではティオジア連星共同体の発足とトラベスタの救援が間一髪で間に合い、結果的にロアキアが退いたことで全滅を免れた。

そのロアキアが連敗している。

仮に、ロアキアが潰れた暁には銀河帝国の次の標的は边境13カ国になるだろう。

そうなつては目も当てられない。

「しかし、銀河帝国軍が如何に強いといっても餓えには勝てまい。ロアキアが大国としてのプライドを捨てて補給路の遮断を行えば容易に追い返せるのではないか？」

「確かに普通ならそうです。ですが……」

屈強な軍として武器弾薬や食料が無ければ恐るるに足りない。

守り側が侵攻軍の補給を断つのは戦の常道である。

しかし、補給拠点そのものが要塞として移動してくるなら話は違ってくる。

それも巨砲を兼ね備えた難攻の要塞と共に……だ。

アルファ―ニがそれを説明すると、皆一様に苦い顔になった。

第二次ガイエスブルク要塞攻防戦に銀河帝国が投入した戦力は70000隻を超え、これはティオジア連星共同体の総戦力に匹敵する数でもある。

それだけの動員能力に補給拠点を兼ねる移動要塞。

「ロアキアはどうなるのでしょうか？」

「オリアス皇子は実力によって実権を握りました。しかし、銀河帝国という未知の国家が現れオリアス皇子を下した。これは銀河帝国にはロアキア最高の実力者であるオリアス皇子でさえ及ばないことを意味します」

「つまり、裏切り者が出る……か」

「はい、統星帝を幽閉して権力を掌握したオリアス皇子を内心快く思っていない貴族達は多いでしょう。彼らが心の底から忠誠を誓っているとは思えません。そこで今回のような事態が起きれば……」

内乱になる。

この場に居る全員がそれを確信した。

＊ ＊ ＊

ロアキア軍が三度目の敗北を喫したことは、ロアキア中に大きな波紋を呼ぶことになった。

銀河帝国に立て続けに三連敗。

しかも損失艦艇の合計が約48000隻と、その数は統星艦隊の約3分の1に匹敵する。

第二次ガイエスブルグ要塞攻防戦での敗北後、ロアキア内は大まかに言えば3つの派閥に分かれた。

現体制の維持を目的とするオリアス派。
幽閉されているテオジウス帝を救出しオリアスの排除を目指す皇帝派。

ロアキアを見限り銀河帝国への寝返りを画策する帝国派。

オリアス派は現体制で要職に付いている者やオリアスを慕う者達が主であり、反対に皇帝派は先の政変により要職から叩き出された貴族達が中心となっている。

帝国派は銀河帝国の勢力範囲に近い場所を領地としている貴族達が多く、彼らはこのままでは時間稼ぎの為に切り捨てられるであろうことを正確に察しており『このまま捨て駒にされるぐらいならいっそ……』と決断した者も多かった。

また、銀河帝国からこちらに付けば爵位・領地・財産は保証するとの言が彼らの背中を押したのも事実だろう。

いずれにせよ、もはやロアキアの分裂は避けられないところまで来ていた。

そして……

宇宙歴806年／帝国歴497年4月7日。

各地の貴族達がオリアスに対し一斉に反旗を翻し、内戦が勃発。

ロアキアは味方同士の血で染まろうとしていた。

第6話 ロアキア動乱2

宇宙歴806年／帝国歴497年4月7日。

ロアキア統星帝国で内乱が勃発。

片方は統星帝を救出するまでの自分たちの盟主として、もう片方は銀河帝国皇帝アドルフに嫁がせることでロアキア統星帝国の皇族の血の存続を図るという自らの行いに対する正当性を得るために。

皇帝派は第六皇女メルセリアを、帝国派は第七皇女オルテシアをそれぞれ旗印として掲げた。

これによって、ロアキアは事実上3つに分裂。

互いに、もはや引き返せない所まで来ていた。

内乱の勃発による余波は、武力たる統星艦隊にも及んでいる。

統星艦隊の司令官であるクラフスト中将、パナジーヤ中將は皇帝派に、ブルーナ中將は帝国派にそれぞれの艦隊ごと付いており、ガムストン大將とその艦隊はどの勢力にも関与せず不気味な沈黙を守っている。

これらを加味した各陣営の戦力は、オリアス派が約77000隻、皇帝派が約54000隻、帝国派が約22000隻である。

そして、それぞれの軍勢の呼称であるが、オリアス派は普段通りロアキア軍、皇帝派は貴族連合軍、帝国派は辺境軍と呼称されることになった。

＊ ＊ ＊

オリアス皇子は、皇帝派に付いたクラフスト艦隊とパナジーヤ艦隊にオルメ、ロズボーン両艦隊を当てて抑えることとし、ボムド、エルッケン、ワイルター、ゴスハットの4個艦隊20000隻に皇帝派に属す各貴族領の制圧に向かわせる。

また、マルゼアス、メルボドの両提督に20000隻の軍勢を与え帝国派の討伐を命じた。

これに対し、今こそオリアスを撃つ好機と見た皇帝派は30000隻の艦隊を帝都ロアキアへと差し向ける。

しかし、それは罠であった。

オリアスは各地に派遣した（と見せかけた）艦隊を反転させ、帝都ロアキアのあるマリウセア星域に集めることに成功した。

兵力差は15000対30000から35000対30000へと逆転。

銀河帝国に負けたとはいえ、オリアスの腕が健在であることを内外に証明して見せた。

貴族連合軍もここまで来て退くことはできない。

数の優位が逆転したとはいえ、その差は約5000隻。

決して覆せない差ではないことが彼らに決戦を強要した。

「このまま一気に敵中央を突破する。攻撃を集中させよ」

鶴翼の陣形で包囲殲滅を狙うロアキア軍に対し、貴族連合軍は中央突破で勝負を決めようとする。

「敵の攻勢が苛烈なため、このままでは戦線が維持できません！」

「もうすぐバルディの分艦隊5000が外側から敵の後背に回り込む。それまで距離を適度に保ち連携して敵の突出を阻め」

「はっ！」

貴族連合軍は攻勢を続けるが、オリアス艦隊が一定の距離を保ちながら後退するため、あまり損害を与えられないでいた。

無論、貴族連合軍の司令であるレイボルト大將はオリアスの狙いを正確に読んでいた。

「閣下、敵別動隊が背後に回り込もうとしております！」

「分かっている、ミユッツ提督の部隊を迎撃に回せ」

ロアキア軍の別動隊が貴族連合軍の背後に回り込もうとするが、予め予備兵力として戦線に参加してなかったミユッツ艦隊4000隻が迎撃に出たため背後を突くことは出来なかった。

「防がれたか、まあいい。両翼の部隊を敵に密着させ防御力を削り取るんだ！」

4個艦隊20000隻が貴族連合軍の側面に張り付いて攻撃を加える。

20000隻というのは無視できる数では無く、しかしそちらに構っているのは正面のオリアス艦隊へ圧力を掛けきれない。

「閣下、このまま消耗戦になれば数で劣るこちらが不利です。いったん退きませんか？」

「こちらは半包围されているのだ。そう易々とは退かせてくれまい。それに、このまま消耗戦になるとは限らん。仮に我々を消耗戦の末打ち破ってもその先には辺境軍や銀河帝国との戦いを控えているんだ。それは向こうも望むところではないだろう」

「なるほど、では敢えて消耗戦も辞さないという形を？」

「そうだ、消耗戦を嫌う敵軍はいったん退いて陣形を再編するだろう。それに合わせてこちらでも退く」

この会話から1時間後、両軍はいったん退いて無意味な消耗戦を終了させた。

翌日、再編を済ませた貴族連合軍は速攻に転じ、その勢いにロアキア軍は押され始める。

「中々の勢いだな……左翼は後退、右翼は前進せよ」

ロアキア軍が陣形を斜めにシフトしていく。

「左翼の後退によってこちらの前衛を誘い込み、中堅と右翼を半回転させて側面を突く……か。だがその手には乗らんよ。全艦、敵の動きに惑わされるな！ 我らが狙うはオリアスの首ただ一つぞ！」

この動きにレイボルトは惑わされず、ロアキア軍中堅のオリアス艦隊に砲火を集中する。

「ちっ、乗ってこないか……なら、このまま行くまでだ。ワイルタ

「提督に連絡、敵の後背に出て後ろから突けとな」

「敵右翼がこちらの後背に回り込もうとしております」

「バウダー艦隊に敵の頭を抑えさせろ。それにしても、先の戦闘と同じ手で来るとは芸の無いことだな」

その後しばらく両軍の応酬が続いたが、戦況が動いたのは3時間後のことであった。

「敵右翼部隊の更に外側から艦隊が回り込んで来ます！ 数、およそ9000」

「バカな！！ どの部隊だ？」

「こ……これは敵の左翼艦隊です」

「左翼だと！？ くっ……図られたか」

「司令官閣下、どうされますか？」

「このまま攻撃を続行する」

「閣下！」

「背後を取られたとはいえ、その分敵中央は薄くなっている。オリアスさえ討ち取ればこの戦いは我らの勝利だ！ 全艦突撃！！」

貴族連合軍の全軍がオリアス艦隊に向け突撃を開始する。

「やはりそう来たか、ここに至っては戦力差で我が方に劣る貴様らが勝利するには私の首を狙うしか無いからな……反撃だ、敵の侵入を許すな！」

そう言つて、オリアスは反撃を命じる。

オリアスにとつても、ここで敵の攻勢に耐え切れるかが勝敗の分かれ目であつた。

オリアス艦隊が必死に耐えている間に、味方の艦隊が貴族連合軍の艦を次々と落としていく。

艦艇の損傷率が4割を超えても尚、艦隊の統率を維持しているのはオリアスの統率力の高さを物語っていた。

そして……勝利の女神がほほ笑んだのはロアキア軍であつた。

貴族連合軍の攻勢を耐え切つたオリアスは反撃を開始する。

この時点でオリアス艦隊の損傷率は5割に達していたが、ロアキア軍の右翼・左翼部隊に散々に叩かれた貴族連合軍の艦艇は10000隻を割り込んでいた。

オリアス艦隊の反撃によって旗艦オズノーロが撃沈。

司令官のレイボルト大将が戦死し、勝敗は決した。

指揮権を継いだ副司令官のウィンディルム中將は直ちに撤退に移つたが、どうにか追撃を振り切ったとき、艦隊の総数は4000隻まで撃ち減らされていた。

戦いに勝利し歓喜に沸いていたロアキア軍であつたが、その8時間後に入ってきた電報によつてその歓喜は打ち碎かれた。

『討伐軍壊滅セリ。マルゼアス大将戦死』

帝国派の討伐に向かったマルゼアス、メルボド艦隊の壊滅とマルゼアス大将の戦死。

それは、ロアキアの命運に一石を投じることとなった。

第7話 ロアキア動乱3

「マルゼアスが戦死した……だと!？」

帝国派の討伐に向かったマルゼアス、メルボド両艦隊の壊滅とその総司令官マルゼアス大将の戦死。

それは、貴族連合軍との戦いにおける勝利に沸いていたロアキア軍にとって驚天動地の出来事であった。

ましてや、腹心であるマルゼアスを失ったオリアスの心境や如何ほどであろうか。

マルゼアス艦隊10000、メルボド艦隊10000を合わせたロアキア軍辺境討伐部隊はルシタール星域にてブルーナ中将を司令官とする辺境軍と交戦。

数はロアキア軍が20000隻、辺境軍が22000隻と互角であったが、実戦部隊である統星艦隊のみで構成されているロアキア軍に対して、辺境軍は統星艦隊の一部と帝国派貴族の私兵から成っているため、練度においてはロアキア軍が圧倒的に上回る。

如何に敵将がブルーナ中将であっても、2000隻程度の兵力差は楽に覆せるはずであった。

だが、今まで沈黙を保っていたガムストーン大将の艦隊15000隻が突如背後に現れロアキア軍に攻撃を仕掛けてきたことで形勢は逆転した。

ガムストーン大将が帝国派貴族である男爵の従兄であり、中将時代の

艦隊副司令官がブルーナ少将（当時）だったことを事前に調べていたなら、この展開を予期して何らかの手を打つことが出来たかもしれない。

しかし、現実には前後から挟撃されのた打ち回るロアキア軍があるのみだ。

程なくして、総司令官のマルゼアス大将が戦死。

メルボド中將が全軍の指揮を引き継いで撤退を成功させたものの、その数は僅か700隻余りであった。

「ええい、奴ら許さぬぞ！ 私自らがこの手で引導を渡してくれる！」

激昂するオリアス。

それを諫めたのは戦死したマルゼアスの伯父でもある宰相のプラヌスであった。

「殿下、どうか落ち着きなさいませ」

「先生、マルゼアスが死んだのだぞ！ 私に仇を取らせてはくれぬのか！」

「辺境軍の司令官ブルーナ中將と裏切ったガムストーン大將は一流の将帥。今の殿下では悪戯いたずらに兵を死なせる結果にしかありませんぞ」

甥を失ったプラヌスの言葉にオリアスは冷静さを取り戻す。

「それに、エルテピア星系の共和主義者どもに不穏な動きがありません。今は迂闊な動きをするべきではありません」

「……そうだな、すまない先生。マルゼアスを失って頭に血が昇っていたようだ」

「心中、お察しします。……ここは先ず力の弱まった皇帝派を叩き潰し、返す刀で裏切り者の帝国派を討つのがよろしいかと」

「それが最善だろうな。それと、共和主義者どもは今は放置でいいだろうか？」

「下手に摘発すれば各地で反乱の火が上がるでしょう。帝国派は所詮裏切り者。皇帝派を抑えれば奴等の蠢動も治まるかと」

「なるほど……」

エルテピア星系における共和主義勢力の反乱は数年前に一度鎮圧されている。

そのときに要した兵力が10000隻であり、今回の事件で如何にロアキアが弱っているようにその程度の兵力であれば捻出するのは難しくない。

故に、皇帝派を排除して足場を固めれば共和主義者たちも大きな行動は取れないだろうというのがプラヌスとオリアスの考えだった。

オリアスとしては直ちに帝国派勢力の鎮圧を命じたいところであったが、各艦隊はマリウセア星域の会戦を終えたばかりである。

将兵たちの休養に加えて損傷艦艇の修理や人員の補充を含めると1ヶ月は掛る見通しであった。

＊ ＊ ＊

宇宙歴806年／帝国歴497年6月2日。

準備を整えたロアキア軍は皇帝派貴族領の制圧に向けて動き出した。ストネル少将率いる2000隻程の部隊が補給路にゲリラ戦を仕掛けてロアキア軍を翻弄したが、一局地による戦果でしかなく、大半の貴族領は制圧されていた。

皇帝派の切り札であるクラフスト艦隊及びパナジーヤ艦隊もオルメ、ロズボーン両艦隊によって抑えられ、救援に向かえずにいた。ウィンディルム中將率いる6000隻の艦隊（内4000隻はマリウセア星域会戦での残存戦力）も皇帝派盟主であるバクーウェン公爵が自らの守りの為動かさなかったことで最後の勝機を逃すこととなり、僅か3ヶ月で皇帝派貴族領の大半はオリアスの手中に落ちることとなった。

だが、ここでオリアスにとって大きな計算違いが起こる。バクーウェン公爵が暗殺され、一部の皇帝派貴族たちが帝国派に合流し出したのだ。

更には皇帝派を見限った軍の将兵も帝国派に鞍替えし、30000隻近い艦艇が帝国派に加わることとなった。

「くっ、これでは総力戦ではないか！」

互いの戦力は互角だが、帝国派の後ろには銀河帝国が控えている。彼らが本格的に参戦してくれば敗北は必至であった。

「一度の戦いで大勝利を収めるしか方法はない……か」

しかし、そのオリアスの構想は予想しない形で裏切られる。
10月10日、辺境軍が各方面で攻勢に出たのだ。

この報にロアキア政府上層部は騒然となる。

「奴等は何を考えている！　これでは各個撃破してくださいと言わんばかりではないか！」

「所詮は脳無し貴族の集まり、特に深い考えなど無いのでは？」

「いや、向こうにはガムストン大将を始めとしてクラフスト中将、パナジーヤ中将、ブルーナ中将など優秀な将帥も多い。何らかの思惑があると見た方が妥当だろう」

ガムストン、クラフスト、パナジーヤ、ブルーナ、ウィンディルムの5個艦隊がそれぞれ別ルートで進撃してくる。

各個撃破の好機であるのだが、それ故に何らかの罠を疑ってしまう。だが、結局彼らに出来ることは、軍勢を分けて迎撃に出るか各個撃破を狙うかの2択しかない。

そんな中、また新たな一報が送られてくる。

「エルテピア星系にて反乱が勃発しました。隣接するアーミア星系、ダレダン星系、テルジント星系でも反乱の兆しが見られます。どうやらこの4星系が1つの共和制国家として独立しようという模様です」

「このような時に……」

正に内憂外患である。

「よもやこれを狙ってではあるまいな？」

「まさか……むしろ狙ったのは共和主義者たちの方でしょう」

「だがどうする？ このままでは身動きがとれんぞ」

「いっそのこと独立を認めてやればいかがでしょうか。銀河帝国は帝政国家、彼らが組むとは思えません。独立と引き換えにこちらを支援させればよろしいのでは？」

「バカな、共和主義者どもに屈せよと言うのか！」

「では、それ以外に良案でもありますかな？」

言い合いが続く中、またしても新たな一報が寄せられた。

「イグディアス王国とオルデラン王国がロアキア陣営からの離脱とティオジア連星共同体への加盟を表明しました」

「何だと!？」

イグディアス王国、オルデラン王国は辺境13国の中でロアキア陣営の貴重な国家であった。

それが、この度の離脱宣言。

これで、ロアキアの銀河辺境地域における影響力は消滅した。もっとも、この国難にあって辺境への影響力も何も無いのだが……。

「こうなっては是非もない。アーミア、エルテピア、ダレダン、テ
ルジントの4星系の独立を認め後方の憂いを無くす。然る後、迫り
来る辺境軍どもを各個撃破にて宇宙の塵にするのだ」

オリアスのこの一声で今後の方針が決まった。

かくして、ロアキア軍も動き出し銀河の混迷の度合いは更なる深ま
りを見せる。

最後に立っている勝者はいずれであろうか。
この時点では、まだ誰も知る由も無い。

その頃のアドルフは……

「うおおおおお、回想キター——（。▽。）——！！」

……エロゲ中であつた。

第8話 ロアキア動乱4

アーミア、エルテピア、ダレダン、テルジントの4星系の独立を認めるというロアキアの声明は銀河各国に驚きをもって受け止められた。

しかし、それは同時にロアキアがそこまで追い詰められているという証であり、ロアキアの危機的状況を物語っていた。
もはや手段を選んでられないほどに……。

このロアキアの譲歩によって、各国は改めてロアキアの状態を再認識し、この事態にどう上手く立ち回れば自国にとって益かを考えて暗躍を始めた。

それは辺境を挟んだ向こう側にあるもう一つの超大国ルフエールも同様であり、早々に共和制国家として独立する4星系への支援を明らかにした。

無論、その当事者たるロアキアにとってはそれらのことは先刻承知である。

この内乱に勝っても負けてもロアキアの国力は大きく減少するだろう。

いや、負けた場合はロアキアという国家が銀河帝国に吸収されて無くなってしまう。

それに比べれば、一宙域の独立など些事たる問題だ。

それに、元々あの4星系（特にエルテピア星系）は共和主義者の勢力が根強い。

こんな時期に腹に爆弾を抱え込むよりは切り離れた方がマシというものだろう。

そこには、そう考えて決断したオリ阿斯皇子の並々ならぬ決意があった。

「敵は5部隊に分かれて進軍中である。数は各10000～15000隻程度で、これは我々にとって各個撃破の好機だ。だが、何も此方の全軍で敵艦隊を1個1個潰して回っているのは敵の集結を促す結果になるだろう。こちらでも部隊を2手に分け、敵に倍する戦力で以って早期に敵を撃滅する。片方は私自らが指揮を執るが、もう片方はロズボーン大将、卿に任せた」

「はっ、承知しました」

「編成は、私の方にオルメ、ゴズハット。ロズボーンの方にボムド、エルツケン、ワイルター、アルダムス。メルボドにはロアキアの防衛を任せる。以上だ」

現在のロアキア軍の手持ちの戦力は60000隻弱。
それも星間警備隊などの艦艇も掻き集めてのことである。

これらの艦隊を30000隻ずつに二分して辺境軍を各個撃破していくのが作戦の骨子であり、もはやそこに活路を求めるしかなかった。

＊ ＊ ＊

「前方に敵影、数12000」

「戦艦バウストリクスを確認。クラフスト艦隊の様です」

「よし、射程内に入り次第攻撃を開始せよ」

オリアス率いるロアキア軍の見つけた最初の獲物はクラフスト艦隊であった。

しかし……、

「敵、逃走していきます」

「何だと、一発も交えずにか!？」

クラフスト艦隊はロアキア軍を確認するや否や撤退に移った。

「これは……不味いな」

5つに分かれて進撃してくる辺境軍の各個撃破を意図していたロアキア軍であったが、その目論みは外されたと言っても過言ではない。ロアキア軍30000隻と遭遇したクラフスト艦隊が逃げに入るのは予想していたものの、一発も砲火を交えること無く撤退というのは想像の範囲外であった。

それをロアキア軍は追撃するが、辺境軍の不可解な行動に疑念を感じずにはいられない。

「どういうつもりだ……、我らを引きつけておいて別動隊が帝都ロアキアを落とすというのであれば有効な方法であるが、今の帝都にそれだけの価値があると思えん」

「罨……でしょうか？」

「そう見るのが妥当だろうな。もっとも、何を目的としているのかも分からないが」

そんな中、オペレーターの声が上がる。

「十時の方向に敵影。数……30000隻以上!!」

「バカな、集結したにしては早過ぎるぞ！ 余剰戦力があつたとも言うのか!？」

「あれは……銀河帝国軍か」

それは、銀河帝国軍のファーレンハイト、スプレイン、グエン・バン・ヒューの3個艦隊32000隻であった。

「撃て！」

「ファイエル！」

両軍の戦端が開かれる。

「（数においてはほぼ互角だが、じきにクラフスト艦隊12000隻が敵戦力に加わるだろう。別の艦隊も駆けつけてくるかもしれない）」

この窮地をどう脱するかオリアスは思案するが、そんな簡単に名案が出てくるわけでもない。

こうしている間にもクラフスト艦隊以下、辺境軍の軍勢が近づいて

きているだろう。

そうなれば数において著しく劣勢にたたされる。

別動隊を指揮するロズボーン提督から連絡が入ってきたのは、そんな時だった。

「ロズボーンか、現在こちらは銀河帝国軍による攻撃を受けている。そちらはどうだ？」

『こちらも、30000隻を超える銀河帝国軍の猛攻に晒されています。現状ではどうにか互角に戦っておりますが、辺境軍の増援が到着すれば我々の敗北は免れません』

「そうか……」

別動隊も銀河帝国の襲撃を受けているとなると増援は期待できない。現状の兵力のみで目の前の艦隊と遠からず駆けつけてくる辺境軍を相手にするのは至難である。

『殿下、もはや帝都ロアキアの陥落は避けられないでしょう。ここはロムウェに遷都なさって捲土重来をお図り下さい』

「っ!! 私に生き恥を晒せというのか!」

『殿下が生きている限りロアキア再興の目はあります。そして、それが我々の悲願でもあるのです。どうか……』

「……………」

オリアスの旗艦デスペリアスの艦内に沈黙が流れる。

やがて、オリアスが搾り出すように一言発した。

「……全軍、撤退せよ」

この命令によって、ロアキア軍は撤退を開始する。

「む、敵は逃げる気か。逃がすな、敵の最後尾に喰らいつけ！」

無論、この機を逃すファーレンハイトではない。

執拗な追撃によって、ロアキア軍の速度を鈍らせていた。

そして、遂にレーダーにクラフスト艦隊の艦影が映る。

ロアキア軍全体に絶望感が漂い始めたとき、オルメ艦隊の旗艦ターロス以下10000隻近くが回頭して銀河帝国軍に多量のビームとミサイルを叩きつけながら突撃を敢行し出した。

だが、この残弾を無視した猛攻はいつまでも続くわけではない。
遠からず限界が来るだろう。

そうなればオルメ艦隊はただの的^{まじ}と成り果てる。

「オルメ、どういうつもりだ！」

『オリアスさま、ここは俺の艦隊が全力で食い止めますんでさっさと撤退してください』

スクリーン越しにそう言ったオルメの顔は、潰れた左目に白い刀傷の痕といつもと何の変わりも無い。

ただ、その表情は妙に晴れ晴れとしていた。

オリアスは悟る、オルメはここで死ぬ気だと。
オルメの犠牲無しにこの窮地を逃れる術は無い……と。

もはや言葉は不要であった。

オリアスは敬礼し、オルメも答礼で応える。

スクリーンが切れるまで、それは続いた。

・・・

「野郎ども、ここで盛大に花火をやろうじゃないか！ 目の前のあいつらを俺達の死出の道連れにしてやろうぜ！」

オリアスとの別れを済ませたオルメは先程を凌ぐ勢いで突撃を続行し、銀河帝国軍の艦列を一時的に突き崩したが、そこまでであった。

無理な突撃で陣形を乱しバラバラになった各部隊は反撃を開始した銀河帝国軍によって各個撃破され、旗艦ターロスも多数の艦に包囲されて最後の花火を盛大に打ち上げた。

一方、ロズボーン大將率いるロアキア軍30000隻も敵の追撃を振り切れずにいた。

敵は銀河帝国軍32000隻にブルーナ、ウィンデイルム両艦隊25000隻が加わり、計57000隻。
足が止まれば包囲殲滅されるのは確定である。

「ボムド、エルツケン、ワイルター、アルダムス。卿らは全速で撤退せよ」

『!』 ロズボーン閣下は……』

「私はここで敵軍を抑える。せめて卿らだけでもオリアス殿下に合流するのだ」

そう言って、ロズボーン艦隊はボムド、エルツケン、ワイルター、アルダムスたち4個艦隊の盾になる。

彼らに出来ることは、爆沈していくロズボーン艦隊に敬礼を送ることだけであった。

＊ ＊ ＊

戦場から離脱したオリアスと各艦隊はレンヴァレル星系第五惑星ロムウェに集結。

帝都ロアキアの陥落は時間の問題であるため、オリアスはロムウェを遷都先とすることを発表した。

艦艇は37000隻と動乱開始時の半分以上ではあったが、それでも小国では保有することすら出来ない数であり、彼らは銀河帝国軍によって帝都ロアキアが占領された後もロアキアが健在であることを示し続けた。

辺境軍を傘下に入れ、帝都ロアキアを占領した銀河帝国もこれ以上占領範囲と戦線が広がることは望まず、ロムウェに侵攻することは無かった。

宇宙歴807年／帝国歴498年1月7日。
ここに、ロアキア動乱はひとまずの収束を見せた。
未だ多数の火種を残したまま……。

その頃のアドルフは……

あれ？

執務中……

えっ？

バカな！

この男が仕事をしている……だと！？

これは天災の前触か！！？

第9話　ちよつ、要塞増やし過ぎ!!

惑星イストアのとある建物の一室に十数人の人間が集まっていた。その人物たちはいずれもルフェール共和国の財界における重鎮たちである。

彼らは各方面に重大な影響力を持ち、民主共和制を掲げるルフェールを陰から牛耳っている。

その彼らが集うこの会合は実質的にルフェールの最高意思決定機関とも言えた。

「ロアキアが落ちたか」

「オリアスも案外情けない。せめて銀河帝国をある程度道連れにしてくればよかったものを」

「しかし……ロアキアがこうもあっさりと滅びるとは予想外でしたな」

「うん？　ロアキアはまだ滅びてなからう。ロムウエへの遷都を宣言していたハズだ。それに、オリアス皇子以下数人の艦隊司令官と2〜3個艦隊程度の戦力はまだ健在ではなかったかな」

「それでも尚時間の問題だろう。銀河帝国の足場固めが終わるまでの間でしかない」

「今のまま推移すれば……な」

「では、彼らを援助すると？　私は別に構わんが国民感情が許すか

な？」

「オリアスを直接支援するのはあの忌々しいティオジア連星共同体の連中だ。我々は共同体の連中にそれとなく働きかけ、多少の援助をするだけで良い。彼らがオリアスを支援したとなれば銀河帝国と敵対関係に成るのは必然。せいぜい奴等には我々の盾となってもらおう」

「なるほど……それは良案だ。だが、イザという時に備えて軍備の増強は必要だろう」

「無論だ。幸いロアキアの事が市民に対しての良い口実となる。今までの共和国艦隊は10個艦隊しか無かったが、この気に12個艦隊まで増やしたいものだ」

「まだ第五艦隊の再建がようやく成ったというのに気の早いことだ。まあ、世論も軍備増強に傾いているから、予算に関しては問題無く議會を通過するだろう」

「……数年前に第三、第五の2個艦隊を失ったのは痛手でしたな。あれが無ければ少なくとも3個艦隊は増強出来たものを」

第三艦隊はシャムラバート広星域会戦でロアキア軍によって、第五艦隊は惑星エリエント上空戦でティオジア連星共同体によって壊滅させられており、現在の第三、第五艦隊はその後再建されたものである。

特に、第五艦隊は残存艦艇数隻という完全な壊滅であり、再建というよりは新しい艦隊を丸々作ったと言っても良いほどであった。

ルフエールの国力からすれば両艦隊の再建が既に完了していても可

笑しくはなかったが、シヤムラバート作戦における失敗とティオジア連星共同体の発足、ウェスタディア侵攻作戦での敗北、ルフエール陣営国家の相次ぐ離脱などから連鎖して起こった政治的混乱により十分な予算が付かず、最近になってようやく完了したばかりであった。

「過ぎた事を言っても仕方あるまい。それよりも、これからどうするか……だ」

「ティオジアの連中を支援しつつ地道に戦力を増強するしか無いのでは？ 直接的な行動を起こそうにも敵は辺境のそのまた向こうだ」

「ましてや、銀河帝国の位置や規模すら未だ分かってませんからね。こちらの情報はロアキア経由で得ているでしょうし、情報戦で後手に回っていることは否めませんな」

「我々に必要なのは……時間か」

「時間が利するのは向こうもですが……それでも我々には時間が必要ではある」

「退役寸前の艦を先日ロアキアから独立した4星系が建国した国家——エルダテミア共和国に供与しては？ どのみち取り壊す予定のものです。それで銀河帝国の戦力を少しでも削ってくれるなら恩の字じゃないですか」

「ふむ……違いはない。確かに銀河帝国があゝの国の独立をすんなり認めるとは思いませんな」

ロアキアの領土を血を流して奪い取ったのは銀河帝国（と辺境軍）

である。

その彼らからしてみれば、エルダテミア共和国の成立（それも無血）など認められるわけではない。

「いずれにせよ、打てる手はすべて打っておくべきだろう。後で後悔したくなければ……では、次の案件に移るとしようか」

そう言って、議題は別の案件に移り出す。

ルフェールの実質的なトップとして君臨する彼らには議論すべき案件が多いのであった。

＊ ＊ ＊

——ベトラント星域——

「巡航艦エイファス撃沈」

「戦艦フレッツン大破、駆逐艦ベルラーラ航行不能」

ゴズハット艦隊旗艦ヴィネスフーゼの艦橋に自軍の被害報告が送られてくる。

攻撃を仕掛けてきているのは銀河帝国のケンプ艦隊15000隻。

元戦闘艇のエースパイロットとして名声を馳せたケンプ上級大将の戦闘艇を巧みに使った戦術によりゴズハット艦隊は翻弄されていた。

「敵戦闘艇、退いていきます」

「ようやく退いたか、それにしても巧妙な……こちらの戦闘艇は？」

「敵の艦砲の射程内に誘い込まれ被害甚大です！」

「くっ……」

ここベトラント星域は現在のロアキア勢力圏の中で銀河帝国との最前線にあり、ゴズハット艦隊5000隻はテンボルト要塞に籠りながら防衛戦を展開することでどうにか持ち堪えていた。

「援軍はどうなっているか？」

「ワイルター艦隊とメルボド艦隊がこちらへ向かっています。到着まで後4時間」

「うむ、それまではなんとか持ち堪えるぞ」

一方、その頃ケンブ艦隊司令部の方でも撤退が検討されていた。

「ふむ、そろそろ敵の援軍が到着しても良い頃合いだな。ここらが潮時か、いったん後退して艦隊の再編後撤収に入る」

「はっ、了解しました」

それに答えたのは参謀長のフリーセネガー大将である。

「それにしても、あの三要塞の改造が完成すればこちらでの行動もずいぶん楽になるのだがな」

銀河帝国はロアキアから接收したアルコート要塞、メルフリーゼ要塞、カストヴァール要塞を移動要塞へと改造していた。

これらの要塞は収容艦艇10000隻の大型要塞であり、来るべき辺境、ルフェールへの侵攻時に役立つと期待されている。

また、収容艦艇3000～5000隻程の中型要塞を5基ほど移動要塞に改造する計画も立てられているが、こちらはまだ計画の段階であつた。

銀河帝国内では、ガイエスブルク級の移動要塞であるオオサカ要塞が完成し、ミズキ要塞が艤装中。

ナルト要塞、ゴリョウカク要塞などの建造も進んでいる。

更にリョジュン要塞やコトウ要塞等の建造も計画されており、これが無理計画でなく実現可能な計画であることが銀河帝国の強大な国力を示していた。

「確かに。そう言えば、帝国本土で新たに艦隊が増設されたそうです」

「ほう？」

「8000隻規模の艦隊が9個艦隊。司令官にアルトリンゲン、ヴァーゲンザイル、カルナツプ、グリューネマン、グローテヴォール、ザウケン、トウルナイゼン、ハルバーシュタット、ブラウヒツチ大將が起用された模様です」

「いよいよ帝国としても本腰を上げるといったところか」

「それと、今年いっぱい軍務尚書ゼークト元帥が退役するそうです。それに伴い、宇宙艦隊司令長官リーガン元帥が軍務尚書に就任します」

「ん？ では新しい司令長官は誰になるのだ？」

「そこはまだ分かっておりませんが、ロイエンタール上級大将かミッターマイヤー上級大将ではと噂されています」

現在の宇宙艦隊司令官の中でも最も能力の高いのがこの2名である。マリナ・フォン・ハプスブルクという異端の天才もいるが、彼女は階級も大将であるし実戦経験も少ない。

「なるほど、それが妥当なところか。面白くなってきたな」

宇宙歴807年／帝国歴498年3月25日。
戦火は未だ続いていた。

ⅡⅡ今日のアドルフⅡⅡ

新帝都フェザーンにある獅子の泉宮殿の一室で、その談合は行われ
ていた。
ルーヴエン・ブルン

「同志J、お主も悪よのお」

「いえいえ、皇帝陛下ほどではございません」

日本人ならば誰もが（？）知っている越後屋と悪代官の密談である。

もつとも、扱われている物はエロゲにエロ本、エロビデオ（DVD？）等であったが。

ボタン！

その時、急に開いた扉から現れたのは軍人からメイドに再転職したメイド長のコノエ・ツルギである。

「陛下、現行犯です。醜い言い逃れなど為さらぬよう……」

「ね、姉さん……」

「これはすべて没収します。それと、これから折檻です」

「い……いやあああああ……！！！」

かくして、悪は滅びたのであった。

第10話 ダレダン星系会戦

宇宙歴807年／帝国歴498年6月6日。

ルーヴェン・ブルン

この日、銀河帝国の新帝都フェザーンにある獅子の泉宮殿で銀河帝国第38代皇帝アドルフ・ゴールデンバウムと旧ロアキア統星帝国の第六皇女メルセリア、第七皇女オルテシアとの結婚式が行われた。

第六皇女メルセリアはこの年19歳。

第七皇女オルテシアは17歳と姉より若干若い。

対するアドルフは31歳。

歳の差が大きいように見えるが、皇族・貴族社会ではこの程度の年齢差の結婚は良くあることである。

むしろ、20歳、30歳の年齢差も珍しく無い。

故に、気にするものなど誰もいなかった。

<アドルフ>

フハハハハハハハ、嫁が一気に2人も増えるとは俺のツキもまだ尽きちゃいないな。

ていうか絶賛フィーバー中だぜ。

嫁が8人に子供が10人。

くくっ、今の俺を止められる者は誰もいない！

あ、コノエ姉さんがいましたスイマセン。

コホン、気を取り直して……。

見ろよ、日頃から『おっぱいぷるんぷるん』とか『ちくしょーめー！』とか『大っ嫌いだ！』とかほざいてる俺と同じ名前のチヨビ髭のおっさんも祝福してくれているじゃないか！

えっ？

そんな人何処にもいなくて？

……………

ま、まあ何だ、見間違えか変な電波を受信したんだろ……たぶん。

ん？

なんか見慣れない奴等が何人かいるな。

誰だあいつら？

……………ああ、旧ロアキア貴族ね。

道理で見た覚え無いハズだわ。

メルセリアとオルテシアが俺と結婚したことで、旧ロアキアの貴族達も正式に銀河帝国の貴族として認められることになる。

貴族の数ばかり増えてもやっかいなだけなのだが……さすがにあの広大な旧ロアキア領の統治は銀河帝国だけでは手に余る。

そういう意味では認めざるを得ないってわけだな。

まあいい、せっかくの結婚式だ。

今日くらいは、くだらん事を考えてないで楽しむとしよう。

＊ ＊ ＊

宇宙歴807年／帝国歴498年6月24日。

銀河帝国のグリルパルツァー艦隊8000隻はエルダテミア共和国を構成する4星系の1つ、ダレダン星系を攻めていた。

「敵軍の掃討、完了しました」

「よし、このまま惑星ヘイルガットへと侵攻し主要施設を破壊する。
全艦……」

「所属不明の艦隊接近。数、およそ8000」

「あれは……ティオジア連星共同体の連星艦隊です」

「ティオジアだど!? 何故連中が介入してくるのだ?」

「おそらく、エルダテミア共和国が共同体に加盟したとかいう理由
だと思いますが……」

そんな中、オペレーターから新たな報告が入ってくる。

「戦艦ザッフィーロ確認!」

「ザッフィーロ?」

「連星艦隊の総司令官、レオーネ・バドエル元帥の旗艦です」

「総司令官自らが出てくるとは。それほどの価値がこの国にあると

も思えんが……それにしても、連星艦隊などと呼称しても所詮は寄せ集めに過ぎないようだな」

目の前の連星艦隊が分艦隊ごとに艦形がまったく違う事から、グリルパルツァーは寄せ集めの混成軍と判断した。

ティオジア連星共同体は規格の共同化を図ってはいるものの、それは新規に建造される艦艇以降のことであり、発足後数年しか経過してない現状では艦艇は所属国ごとにバラバラであった。

そうである以上、それらの艦艇を一括して運用するのは容易なことではなく、寄せ集めという判断は間違ったものではない。

ただ、グリルパルツァーの誤算はその艦隊を率いる人物たちが並では無いことを知らなかったことだろう。

そのツケを彼は身を以って思い知ることになる。

「おもしろい、バドエルとやらがどれほどのものか……試してやろう」

そう言って、グリルパルツァーはほくそ笑む。

グリルパルツァーの階級は大将。

1個艦隊の指揮を任されているが、その数は8000隻と上級大將の15000隻の半分程度である。

だが、ここで勝てば昇進はほぼ間違いなく、真の意味で1個艦隊を指揮できる。

彼にこの機会を逃す選択は無かった。

——戦艦ザッフィーロ 艦橋——

連星艦隊総旗艦ザッフィーロの艦橋では、総司令官レオーネ・バドエル元帥が先手必勝とばかりに攻撃命令を下そうとして副官に止められていた。

「閣下、さすがにいきなり攻撃するのはマズいと思うのですが」

「ちっ……そうだな、連中に警告を発しろ。『エルダテミア共和国はティオジア連星共同体に加盟した、直ちに軍を引け』とな」

グリルパルツァー艦隊に向け警告電が発せられる。

「彼らは大人しく従ってくれるでしょうか？」

「あのロアキアを下すほどの国家がこっちの言い分を素直に認めると思うか？ だいたい、連中はエルダテミア共和国の独立を認めてねえ。そう簡単には退かんだろ」

「銀河帝国軍より返信、『エルダテミア共和国なる国家の独立を銀河帝国は認めておらず。直ちにこの宙域より撤退せよ、さもなければ殲滅する』以上です」

「だろ？」

「仰るとおりでした」

そう会話している間にも、ティオジア軍に撤退の意思無しと判断した帝国軍が砲撃を始める。

「敵、撃ってきますす！」

「こっちも攻撃開始だ。俺たちの強さをいけすかねー帝国のやつらに思い知らせてやろうぜ！」

戦いの幕が切って落とされた。

＊ ＊ ＊

ダレダン星系に展開する帝国軍とティオジア軍の戦力は共に8000隻。

両艦隊の司令官であるグリルパツァー、バドエル共に優秀な指揮官であったが、分艦隊司令の力量にはバドエル艦隊に分があった。

守勢に関しては鉄壁ミュラーに匹敵する実力を持つユリアヌス・ドルキヌス中将。

機動性に富んだ艦隊運用を得意とするダーフィット・ロン・カルデ
ン中将。

攻守のバランスが良く、用兵の妙に長けるネルジュワール・ラミン
中将。

銀河帝国であれば1個艦隊を任されても不思議ではない面子である。

開戦後2時間が経過したところで、最初に仕掛けたのは帝国軍であった。

「右翼を伸ばして敵を半包围せよ」

グリルパルツァーの構想としては、右翼を伸ばして敵を半包囲下におき、その後左翼を前進させて敵右翼を拘束することで徐々に戦力を削り取って行くものであった。

だが、その構想は未完に終わる。

「頼むぜ、おっさん」

『まかせておけ』

そう答えたのはティオジア軍左翼を任されているカルデン中将である。

彼の指揮下にある2000隻の艦艇は元々アルノーラ軍に所属していた艦艇であり、アルノーラ軍は高機動戦術に定評がある国であった。

そして、元アルノーラ王室近衛艦隊副長という肩書を持つカルデンは当然ながら機動戦を得意としていた。

「全艦全速、敵に我々の速攻を見せつけてやれ！」

オレンジ色に染め上げられた戦艦ドライベルクの艦橋で叫ぶカルデンは、その能力を遺憾なく発揮し、見事帝国軍右翼の頭を押さえることに成功した。

「く、早いな。艦隊運動では敵に分があるか」

そう言って、グリルパルツァーは作戦の失敗に落胆した。

彼自身、『敵が自分たちより優れているわけが無い』と心に驕りがあったのは否めない。

「（このまま中央を突くか……いや、ここで攻勢に出るのは危険すぎる。右翼の頭を押さえられている現状、失敗すれば敵の包囲に曝されてしまう）」

そうグリルパルツァー考えたが、実はこれによって勝機を逃していた。

このとき、カルデン分艦隊は帝国軍右翼の頭を押さえるため突出しており、バドエルの本隊との繋ぎをユリアヌス中将の分艦隊が担っていた。

つまり、一時的にバドエルの本隊が手薄になっていたのである。

グリルパルツァーがここで中央を突いていれば、数の差は3000対2000。

バドエルの首を取れなくても、後退を強いることは出来たはずである。

「左翼はどうなっている？」

「敵右翼の強かな反撃にあい膠着状態です」

帝国軍左翼は2500隻。

ティオジア軍右翼の2000隻に対して数で有利なはずであった。

「敵の方が一枚上手ということか……左翼のあの機動性といい、敵は優秀な中級指揮官を揃えているようだな」

数において互角である以上、それを指揮する司令官や分艦隊司令の力量によって優越が左右される。

現状、分艦隊司令の力量ではティオジア軍に軍配が上がっているようであった。

「敵中央、突っ込んできます！」

「何だと！」

突如、ティオジア軍中央にあったバドエルの直属部隊が高速で帝国軍中央へと突撃を仕掛けてくる。

不意を突かれたことも影響して帝国軍中央は混乱に陥った。

「なんというスピードだ……だが、数ではこちらが上。敵の先頭へ砲火を集中して勢いを削いた後、押し返せ」

「閣下、右翼部隊が……」

帝国軍中央がバドエル隊への対処で両翼との連携が崩れた隙を突いて、ユリアヌス中将の部隊が帝国軍右翼へと攻勢を掛けている。

「く、敵の狙いは始めからこれだったか！」

ようやくバドエルの狙いに気づいたグリルパルツァーであったが、時既に遅し。

戦況はティオジア軍に傾いていた。

「このままでは分が悪い、全軍を後退させて陣形を立て直せ」

グリルパルツァーも無能ではない。

このままでは遠からず右翼部隊が壊滅するであろうことは容易に予測できた。

そして、それを回避するにはある程度の損害を覚悟でいったん後退し、崩れた陣形を再編するしかないことも。

だが、今回は相手が悪過ぎた。

「おっと、逃がしはしねーよ」

バドエルは突型陣をとって帝国軍中央部へと突撃する。

「このままでは食い破られます！」

「（く、このままでは……）」

「直撃、来ます！」

一発のビームがグリルパルツァーの旗艦エイストラに直撃し、エイストラの推進力を大幅に奪い去った。

「こんなことが……」

直後、新たなビームの直撃を受けたエイストラは爆沈。
グリルパルツァーも戦死した。

エイストラの撃沈はバドエル艦隊旗艦ザッファイロの艦橋からも確認できた。

「敵旗艦、撃沈」

オペレーターの報告に周囲から歓声が上がる。

「やりましたな」

「ああ。だが、まだ戦いは終わっちゃいねえ。ここで叩けるだけ叩いておくんだ！」

旗艦を失って壊乱状態にあるグリルパルツァー艦隊に対し、バドエルは容赦なくたたみ掛ける。

このまま行けばグリルパルツァー艦隊の全滅も時間の問題であったが……

「後方より敵艦隊。数8000」

「何だと！」

「推定接触時間は？」

「およそ、3時間です」

「まだ多少時間はあるようですが……」

「いや、これだけやれば十分だ。直ちに撤収に入れ」

かつて、ヤン・ウェンリーは名将の戦いぶりについてこう述べていた。

『明確に目的を持ち、それを達成したら執着せずに離脱する』

今まで積み上げて来た戦果だけではなく、そういった意味でもバドエルは名将と言えた。

6月24日23時10分。

クナップシュタイン艦隊が救援に駆け付けたことでバドエル艦隊は撤退。

グリルパルツァー艦隊は全滅を免れたが、残存艦艇は4000隻と実に半数を失っていた。

この戦いは、新天地戦争（銀河帝国呼称）が始まって以来、初めての銀河帝国軍の敗北であったと歴史に記されることになる。

ⅡⅡ今日のアドルフⅡⅡ

アドルフは哲学書を読んでいる。

と見せかけて、それは表紙が偽造されたエロ本だった。

無論、後でメイド長であるコノエ・ツルギにバレて折檻されたのはお約束である。

.....

やっぱり駄目だ、この男。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5653w/>

銀河転生伝説 ～新たなる星々～

2011年11月18日03時41分発行